

- 一、硯の海女手本
- 一、安見年代記
- 一、煙草記
- 一、百壽圖
- 一、連歌雨夜記
- 一、三用集
- 一、連歌式目和歌抄

金澤上堤町

正徳五年

三ヶ屋五郎兵衛板

右藏版目録は野村直五郎の家に藏す。直五郎は三箇屋五郎兵衛の子孫なり。此の藏版の書類の中にも、三用集・六用集は各小冊子にて、今世に至りても所持するもの多し。また岩桂詩集或は江戸道中圖なども世に残れり。

○覺中小路

舊傳に云ふ。昔内山覺中といへる醫師、堤町家の瓦地に邸宅あり。醫藥の事にて急に登城するに、道路不便なるにより、其の由申立て、水溜堀の傍に初て往來を付け、是より登城せりと。故に此の道路をば俗に覺中小路と呼べり

と。按ずるに、内山覺中が居邸は、延寶の金澤圖を見るに、一つ水溜の瓦地、中川氏居邸の隣地也。元祿六年の土帳にも、内山三清堤町の後中川采女隣とあり。延寶の金澤圖に、此の小路なし。其の後付けたるなるべし。

○内山覺中傳

内山氏は、舊藩の醫官にて、代々覺中と稱す。延寶五年の由緒帳に云ふ。初代覺中は、毛利元就之家人内山土佐之次男。慶長十一年利長卿越中富山御在城之頃、富山に於て被召抱、家祿三百石賜之。寛永四年死去、男子無之に付、毛利輝元之家人にて己の兄内山右近の子を嗣子とす。寛永五年被召出、百石賜之、二代覺中是也。と。按ずるに、寛永四年の土帳に、御藥師衆三百石覺中とあり。是初代覺中也。又寛文十一年の土帳に、百石醫師内山覺中七十七歳とあり。是二代覺中也。諸士名言録に云ふ。元祖内山覺中は、瑞龍公富山に御座被成頃被召出。則ち富山に覺中町と稱する地あるは、彼の居所也と云ふ。今の覺中の會祖父なる覺中は、稻若水の高弟にて、物産學に長ぜり。若水の編輯せし庶物類纂を幕府へ獻せられし後、幕府に於て補

修を命ぜらるに付、若水の門弟内山覺中を召出さるべき旨、丹羽正伯を以て被仰下といへども、覺中辭退すと云々。また享保録に云ふ。庶物類纂成功に付、幕府へ獻上被成候。後於幕府尙編纂被仰付由にて、丹羽正伯老を以て内山覺中へ可被召出旨内意申來る。覺中恭奉存候へども相望不申旨御斷申上げたる處、重而於江戸居屋敷も廣く望次第可被下旨申來る。其節覺中御請に、加賀守代々懇意に被召仕、殊に於越中富山覺中町杯申所も有之。か様に鳴申次第も候間、是非罷出申了簡無之。厚恩を忘れ申儀難仕候間、御免被下候へと申上候處、左候は、加賀守殿へ申遣し、加恩の沙汰有之様可仕旨申來候處、段々難有仕合奉存。乍去少分たりとも加賀守存寄を以て被申付儀は格別、被仰遣に付加増過分に申付有之候とも、無本意奉存。譬へ被申付共請不申了簡之旨申立て、堅く御斷申上けたりと云ふ。とあり。其の氣性の程知られけり。榮華雜記に、享保八年四月三日於江戸。御醫師藥種見内山覺中御宛行百石之處、拾人扶持増被下。先年稻若水へ被指添、本草之儀申談候様に被仰渡處、其の以後心懸け、此度長崎へ

罷越度旨相願。遠國之儀、家來無人に而は如何に被思召、扶持方増被下之。と見え、護國公年譜に、享保十九年五月内山覺中、稻新助若水子、御用有之旨に而被爲召、江戸へ被遣、同年十二月十六日内山覺中へ百石御加恩被下、稻新助へ拾人扶持引足被下。とあり。右は幕府に於て、續庶物類纂の成功を遂げしめられん爲めなりと聞ゆ。さて加藤惟寅の蘭山私記に、元文三年七月初日庶物類纂御用相勤候人々、内山覺中百石加増知被仰付、行山傳左衛門・高島金左衛門兩人へ白銀五枚・白布三疋拜領被仰付とあり。行山・高島の兩人も、庶物類纂の御用掛りにて、内山覺中の附屬人なる故なり。稻新助は、享保九年の土帳に、儒者七人扶持稻籬之助とあり。是と同人なるべし。諸士系譜には、若水の二代千鶴改新助とあり。

○中川武藏守蕃邸

延寶金澤圖にこゝに出せる如く見たり。武藏守光重は宗半が事也。烈祖成續に、中川宗半、名光重、八郎右衛門重政子。從五位下武藏守秀吉公近臣。剃髮號宗半。とあり。備忘録に、中川宗半は尾州の人。中川八郎右衛門の嫡子也。尾